

花の歌歳時記

前田康子

夏の鞍馬駅に降り立つと、山の匂いがむつとしている。山を登り始めると、涼しい風が木々の間から吹いてきて、汗がすうっと引いていくのがわかる。

山道の途中で虫好きの夫が何か覗き込んで、「ああっ」と声を上げた。息子と私が背後から覗くと、枝の先の葉が縦半分に分かれて、くるくると小さく巻かれつつ、ぶらさがっているのがあった。

人間の指の力で折ったのではない、もっと器用な葉の形である。近づいてよく見てみると、一匹の小さな虫が忙しそうに動いて作業している。それはオトシブミという虫であった。巻いた葉の中には卵が入っているという。孵った幼虫はその葉を食べて大きくなるといふから驚きである。

その作業は、小さな虫のすることであるから、とてつもなく時間がかかるようだった。痺れを切らした子供が「早く行こうよ」と手を引っ張った。



絵・サギソウ／小柳吉次

夕菅

夕菅。その名前を聞いただけで、昔の恋人に今から会いに行くような、どきつとした感じがする。

「僕はあなたの口にする言葉をおぼえた／それはひとつの花の名であつた／それは黄いろの淡いあはれ花だつた」有名な立原道造の

「ゆふすげびと」という詩を思い出す。伊吹山の花畑で初めて、この花を見たが、淡い光を集めたような凜とした花にうっとりとした。

ゆふすげの花ひらきだし沼の水動きだし
こびびとの来る時間ちかづく

松平修文「原始の響き」

詩のようなひびきを持った歌である。夕菅は夕方から咲き出し、次の日の午前中にはしぼんでしまう花である。

恋人が来るのを待っている時間。それはもしかすると、恋人と過ごしている時間よりも、もつと至福の時間であるかもしれない。

ひと恋はばひとを殺むるころとは風に
乱るる夕菅の花

道浦母都子「ゆふすげ」

この歌の背後には、「馬を洗はば馬のたま

しひ冴ゆるまで人恋はば人あやむるころ」という塚本邦雄の名歌がある。人を恋うことの激しさを、夕菅の花は隠し持ちつつ咲いているようである。

やがて夏やがてにつくわうきすげ咲く咲きて一日こつきりの花

今野寿美「若夏記」

夕菅と同じ種類の仲間日光黄菅（旧仮名

表記ではこの歌にあるように「につくわうきすげ」という花がある。夕菅はレモン色だが、この花はもう少し橙色を混ぜたような色の花である。植物図鑑にはゼンテイカという名で載っている。この歌は作者が尾瀬を訪れたときのもの。

ゆうすげ
夕菅





のうぜんかずら
凌霄花

凌霄花

凌霄花のあの色は、遠くから歩いてきても、すぐにわかる。梅雨明けの夏の暑さに似合う色である。蔓が巻き付いて伸び、花がわりと大きく垂れ下がって咲いている。

くれなるに凌霄花さきたれば廂くらくも
家古び見ゆ

窪田空穂『濁れる川』

庇のある家というのもこの頃では減ってきている。かっと照りつけていても、庇がある

と、そこからは暗く木の家の独特の感じがあ
る。凌霄花の明るい色は、そんな夏の家に、
よく似合う花だと思ふ。

虹は飛ぶ、遠いかづちの音ひびく真昼の
窓の凌霄花

佐佐木信綱『新月』

かすかな虹の羽音。そして遠くの空の雷の
音。凌霄花。夏の真昼にしんとした時間が過
ぎて行く。

降らんとして降らぬ昏きのひところの
うぜんかずらすさまじく垂る

花山多佳子『楢田の実』

夏の日の雨が降る前の、もわあつとしたあ
の感じが好きである。入道雲を眺めていると
急に曇って雷が鳴ったりして、そろそろ降っ
て来るだろうという予感。母が「危ないよ」
というのに、自転車で出かけたあたり。凌霄
花の花はまさにすさまじく咲き、花の中へ吸
い込まれてしまふそうである。





ねじ花

ねじ花

近所の鉢植を見ていると、捨てられて放つて置かれたような植木鉢に、捻子花が毎年咲いている。うらやましくて、うちの何も植えてない鉢に、生えてこないかと思うが、なかなかである。

ひとつひとつの花を見てみるととても小さ

いが、ラン科の花なので、ちゃんと蘭のようなかたちをしている。右巻であったり、左巻であったりいろいろである。

ねじ花の茎をきりきりみてみづに挿すとほざかりゆくくるしみひとつ

上村典子「草上のカヌー」

捻子花はこの頃では、芝生の中によく咲いていた。それを小さな花瓶に挿してみる。くるくると回って咲いている花を目で追

っているうちに、何かふっと吹っ切れていたのだろう。

ねじ花は庭芝を抜き直立てりねぢりそこねの花もまじへて

上田三四二「照徑」

捻子花のなかには、よく見ると、ねじれずに、真っ直ぐに花をつけているのがある。また一方では、背丈が短いのに、きっちり何重にも花がねじれているものもある。花にもいろいろな性格があるのだ。上田三四二の歌は、細かいところを観察して、「面白く詠んでいる。

ねじ花のねじゆるゆると咲きつぎてこの子に淡き記憶力生るる

前田康子「ねむそうな木」

子供が一歳になったときに作った歌である。捻子花の形を、DNAの螺旋の形のように思った所から作った。しかし毎日、花を観察しているひとから、ぐるぐると咲き継ぐのでなく、花はいろいろな箇所から、ばらばらに開くことを教えられた。

まえだ・やすこ「塔」会員